



キュレーター 紹介

ピエル・ルイジ・タツツイ (1941年イタリア、コ罗纳ータ生まれ)

あいちトリエンナーレには、アーティスト以外にも海外からキュレーターが関わっており、今回は、その中からピエル・ルイジ・タツツイさんをご紹介します。タツツイさんは美術評論家、コラムニスト、キュレーターとしてヨーロッパを中心に活動しています。1988年「第43回ヴェネツィア・ビエンナーレ」、1992年「第9回ドクメンタ」(ドイツ、カッセル)などの国際展を始め、多数の展覧会企画に携わり、2003年には森美術館の開館記念展「ハビネスアートにみる幸福への鍵」展でもゲストキュレーターを務めるなど日本との親交も深く、アジアの作家にも強い関心を持っています。11月には来日され、記者発表にも出席される予定です。タツツイ氏からのメッセージ「あいちトリエンナーレの記念すべき第一回目のテーマは「都市の祝祭」です。芸術とその発表の場との相互関係はとても重要で、作品の存在が場所に独自のリアリティを持たせ、またそのことによって作品や展覧会が意味を成すのです。あいちトリエンナーレ2010は近年、都市の拡大化によって複雑な様相を呈している芸術とその発表の場における相互関係、さらには芸術のリアリティについて考える機会を与えてくれることでしよう。」

芸術作品になった便器

なんでこれが芸術なの?!—現代美術の会場では、こんな言葉がよく聞かれます。もはや何でもありの観を呈している現代美術ですが、今から100年近く前には、なんと便器を美術展で展示しようとした大胆不敵な人がいました。今日、現代美術の源流の一人として名高いマルセル・デュシャンです。デュシャンの便器は芸術だったのでしょうか。あるいは、単なる悪ふざけだったのでしょうか。1917年、デュシャンは何の変哲もない男性用小便器をどこからか手に入れてきて、向きをちょっと変え、「R・マット 1917年」と、偽名のサインを書き入れました。そして、《泉》という下品なユーモアの利いたタイトルを付けて、マット氏による作品として、ある展覧会にそれを出品したのです。その展覧会ではすべての出品に対して無審査を原則としていて、誰のどんな作品でも展示されるはずでした。しかしマット氏の《泉》は、さすがに不道徳が過ぎるとして展示を拒否され、結局、一般公開の前にあえなく会場から撤去されてしまいました。

このスキャンダラスなエピソードには、考えるべき大きな問題がいろいろ含まれています。たとえば、高尚であり独創性が重んじられるべき美術の世界で、デュシャンが市販の便器を作品として展示しようとしたこと。あるいは、どんな作品でも受け入れることを大原則としていたその展覧会が、それを曲げてまでデュシャンの出品をはねつけたこと。そこには、美術というものに対する従来の観念や美術界の体制に対するデュシャンの果敢な挑戦、あるいは過激な挑発を見ることが出来ます。デュシャンの便器事件は、それだけでは終わりません。すぐにデュシャン側の反撃が始まります。《泉》が展覧会で拒否された後、デュシャンが編集委員の一人を務めるある雑誌に、その作品を擁護する匿名記事が掲載されました。その筆者(デュシャン本人?)は、《泉》の作者がそれを自分で作ったかどうかは問題ではなく、彼がさまざまな物体の中からそれを選び出したことが重要なのだと主張します。そうして取り上げた一つの日常用品を、作者はその本来の機能から切り離して展示し、その物体に対する今までにない新しい見方を提示してみせた——そこにデュシャンの《泉》の意義があると言うのです。「R・マット 1917年」とサインの入った既製品の便器は、こうして芸術作品として世に認められていき、今では美術史における重要な作品の一つとなってさえます。考えてみれば、モネやルノワールといった今日とても人気のある印象派の絵画ですら、彼らがそれを発表した当初は新しすぎて理解されず、ひどい批判と嘲笑を浴びたものでした。革新は、常識や良識を覆したり超えていくものであるため、特に芸術の世界ではしばしば強い反発や拒絶を招きます。もしあなたが一点の現代美術作品を前に、そんな気持ちを抱いたら、早々に結論を下さず、少し立ち止まってその作品と向き合ってみてください。ひょっとしたらそれは、価値ある新しい創造と出会った素敵な瞬間なのかもしれないのですから。

(愛知県美術館学芸員 大島徹也)

現代美術なんて こわくない!

Who's Afraid of Contemporary Art?
[第1回]



マルセル・デュシャン
《泉》
1917年
Photo: Alfred Stieglitz

あいちトリエンナーレ2010イベント

長者町プロジェクト2009

「長者町プロジェクト2009」(10月10日~11月15日)は、アーティストが住民やまちの歴史との出会いを通じて新たな作品を作り出し、都市の中にアートの表現を持ち出すことによって、たくさんの人々に現代アートを体感してもらうプロジェクトです。オープニングには、200人を超える人々が集まり、空店舗や空ビルで繰り広げられる現代アート作品の展示の数々を楽しみました。また、長者町通りを歩行者天国にしておこなった「みがきッコ」の路上パフォーマンス、現在注目されるコンテンポラリー・ダンサーによるダンスや音楽の公演をまちなかで展開した「長者町パフォーマンス街(どおり)」などイベントも多数開催しました。11月14日、15日には、神田愛知県知事も参加して、恒例のまちの祭り「糸びす祭」の中で、アーティストによるアート屋台やショップが店出され、まちなかにアートがあふれました。さらには、毎日先着50名にプレゼントされたオリオール&フオンタネル社製リボンも大好評。これは、あいちトリエンナーレ2010出展作家の草間彌生氏が、今回の企画のためだけにデザインしたものです。手首やカバンに身につけたリボンが、まちと人とアートを結ぶきっかけを作りました。



《みがきッコジャンボリー 2009 in 長者町》
© Migakikko-Naohiro Deguchi / Takaguki Yamamoto

あいちトリエンナーレ2010関連事業

「あいちアートの森=アートが開くあいちの未来=」が開催されます。

2009年12月から2010年3月にかけて、芸術家、芸術大学、地域の人々や公共施設などが協力連携して、県内6カ所で現代美術の多彩なイベントを展開します。広場や空き家などで現代アート作品を展示するほか、地域の人たちと連携した制作やワークショップを行ったり、パフォーマンスや音楽イベントを開催します。アートで地域を活性化するプロジェクトです。

広小路プロジェクト	12月-1月	名古屋市街地 [SMBCパーク栄、朝日神社境内 など]
東栄町プロジェクト	12月-3月	北設楽郡東栄町 [旧新城東高校本郷校舎、東部小学校 など]
堀川プロジェクト	1月-3月	名古屋市街地 [東陽倉庫テナントビル、ほとりす など]
常滑プロジェクト	2月-3月	常滑市 [名古屋芸術大学常滑工房、廻船問屋瀧田家、セントレア など]
豊田プロジェクト	2月-3月	豊田市 [豊田市美術館、喜楽亭 など]
佐久島プロジェクト	2月-3月	幡豆郡一色町 [弁天サロン、西渡船場界限 など]

詳しくは、あいちアートの森のポスターやチラシをご確認ください。
主催 = 文化庁、あいちアートの森実行委員会
お問い合わせ = あいちアートの森実行委員会事務局(愛知芸術文化センター 愛知県美術館企画業務課内)
〒461-8525 名古屋市中区東桜1-13-2 TEL.052-971-5511(代) FAX.052-971-5604

現代美術展企画プログラムの募集

あいちトリエンナーレ2010では、現代美術の国際展と併せて、企画コンペによって選考した企画による現代美術展を開催します。愛知芸術文化センターと、長者町地区(名古屋市中区錦)にある空ビル等を展示空間にした、現代美術に関する意欲的な企画を募集するものです。今回はこのうち、愛知芸術文化センターを展示場所とした9企画を募集します。【応募期間=2009年11月30日(月)まで】募集についての詳細はホームページ(<http://aichitriennale.jp/kikakucompe/>)をご覧ください。

あいちトリエンナーレ2010ボランティア募集

来年7月~11月に愛知芸術文化センター、名古屋美術館、長者町地区など、あいちトリエンナーレ2010の各会場で活動していただくボランティアを募集しています。活動内容は、展示作品の視察や会場案内、アーティスト・舞台公演等のサポート、ガイドツアーなど、アーティストやスタッフと一緒にトリエンナーレを盛り上げましょう!

あいちトリエンナーレは2010年から3年ごとに定期開催する国際芸術祭です。「都市の祝祭 Arts and Cities」というテーマのもと、愛知から世界へ新たに文化芸術を発信するため、現代美術作品の展示や舞台芸術の公演によって世界の最先端の芸術の動向を紹介していきます。

正式名称 = あいちトリエンナーレ2010 / Aichi Triennale 2010 テーマ = 都市の祝祭 Arts and Cities
開催時期 = 2010年(平成22年) 8月21日(土)~10月31日(日) [72日間]
会場 = 愛知芸術文化センター、名古屋美術館、長者町地区
※その他、オアシス21、広小路通等のオフィス街や商店街など会場周辺の都市空間で展開するほか、様々な文化芸術施設等と連携していきます。
主催 = あいちトリエンナーレ実行委員会 芸術監督 = 建島哲(国立国際美術館館長)
公式サイト = <http://www.aichitriennale.jp/>

出品作家 =
現代美術/草間彌生、渡辺英司、西野達、島袋道浩、ヤン・フードン、ホアン・スー・チエ、ダヴィデ・リヴァルタ、蔡國強、三沢厚彦 + 豊嶋秀樹、ケリス・ウィン・エヴァンス、トム・フリードマン、ジェラティン、小金沢健人、シブリアン・ガイヤール、ハンス・オブ・デ・ビーク、宮永愛子、志賀理江子、フィロス・マフムード、梅田宏明、トーチカ、KOSUGE1-16、浅井裕介、斉と公平太、他
舞台公演/ヤン・ファープル、ローザス、チェルフィッチュ、ニプロール、平田オリザ+石黒研究室(大阪大学)、他 [最終的には約70組が参加予定]

あいちトリエンナーレニュース vol.1 [あいちトリエンナーレ2010 機関誌 1号] あいちトリエンナーレニュースは、基本的に3ヶ月に一度、開催に向けた最新の情報をお届けします。
2009年11月発行 発行 = あいちトリエンナーレ実行委員会事務局(愛知県県民生活部 文化芸術課 国際芸術祭推進室内)
〒461-8525 名古屋市中区東桜1-13-2 愛知芸術文化センター6階 TEL.052-971-6111 FAX.052-971-6115 geijutsusai@pref.aichi.lg.jp <http://www.aichitriennale.jp/>

あいちトリエンナーレニュース

AICHI
TRIENNALE
NEWS
vol.1

[あいちトリエンナーレ2010 機関誌 1号]

Cai Guo-Qiang
Innupture: Stage One
2004
Nine cars and sequenced multichannel light tubes
Dimensions variable
Collection of Seattle Art Museum, Gift of Robert M. Arnold,
in honor of the 75th Anniversary of the Seattle Art Museum, 2006
Exhibition copy installed at Solomon R. Guggenheim Museum, New York, 2008.
© Solomon R. Guggenheim Foundation New York.
Photo by David Heald

3年に一度の国際芸術祭

都市の祝祭 Arts and Cities

2010.8.21 → 10.31

<http://www.aichitriennale.jp/>



蔡國強 Cai Guo-Qiang
Black Fireworks: Project for IVAM
2005
Gunpowder on paper, mounted on wood as 15-panel screen
240 x 1342 cm [94 1/2 x 528 3/8 in.] overall
Collection of the artist
photo: Hiro Iihara
courtesy: Cai Studio

表紙のアーティスト 蔡國強 (さい・こつきょう)

表紙はいちトリエンナーレ2010参加アーティストの蔡國強が、2008年にニューヨーク・グッゲンハイム美術館で開催された個展で、館内の大きな吹き抜けにインスタレーションを展開したときのものです。蔡は中国出身のアーティストで、現在はニューヨークに活動の拠点をしています。彼は世界的に活躍するアーティストとして美術館での展覧会に出品するだけでなく、各地で大規模なプロジェクトも行なっています。最近では北京オリンピックの開会式でヴィジュアルディレクターを務め、花火による視覚演出をしたことでも大きな話題を集めました。蔡は以前から花火や火薬を使った作品やプロジェクトを多数発表してきました。「黒花火: IVAMのためのプロジェクト」(2005年)も、火薬の焦げ跡がまるで水墨画のように、ときに繊細で、ときにダイナミックに様々な表情の線やイメージを描きだす「火薬ドロ잉」シリーズのひとつです。この制作の過程は、今回のトリエンナーレにおいてパフォーマンスとしても公開される予定です。

トリエンナーレを訪れるみなさんへ、蔡さんからメッセージをいただきました。「初めから現代アートとして見なくていいんですよ。“難しい”“わからない”と距離を持ってしまうのではなく、なにかたのしそうなことやっているなあ、おもしろそうな人たちが集まってきているなあ、と見に来ればいいんですよ。人間は何万年進化しても永遠に好奇心を持ち続けることを忘れてはならないんですよから。」

アーティスト・紹介

宮永愛子

宮永愛子
《風の届く朝(部分)》 2008
ナフタリン、ミクストメディア インスタレーション
「釜山ビエンナーレSea Art Festival」釜山、韓国
ディレクター: Jeon Seung-Bo 写真: 宮永愛子



参加作家のひとり、宮永愛子は活躍めざましい若手アーティストです。彼女の作品の特徴的なもののひとつに、“変化する作品”があります。作品は会期中に少しずつ姿を変え、最終日には思いもよらない姿を私たちに示します。素材にはナフタリンが用いられ、靴や電話機、時計など日常生活用品がモチーフとなっています。そして例えば時間のように、日常の中に確かに存在しながら目に見えないものを、形のあるものを通して感じさせてくれます。作品はその姿を変えながら、記憶の中に永遠の命を宿すようでもあります。

インスタレーションにおいては空間との響き合いも重要であり、それについて自ら次のように語っています。「インスタレーションの場合、どのように展示するのかということはとても重要です。私の手元から生まれる作品は、展示した場所で呼吸をはじめ、空間も含めて作品となるからです。私は多くの場合まず会場に行きそこにある時間や日常の記憶を見つけることから始めます。例えば韓国・釜山ビエンナーレでは、事前に会場を訪れ街を散策し、そこで出会った水槽を作品に使うことで、大きなインスピレーションを得ました。作品のきっかけはいつも生活の中にあります。「海と川の間」「永遠の時間」など、身近で当たり前な不思議。その世界に耳を澄ますと、いつもの時間が何倍も長くまた短く感じるのです。時間旅行。この旅のはじまりが作品となってみなさんとの出会いへと繋がっています。」あいちトリエンナーレでも新たな作品を発表してくれる予定です。会期中にしか見ることができない貴重な作品との出会いとなることでしょう。

あいちトリエンナーレ2010では、舞台芸術の参加が大きな特色のひとつとなっています。参加団体であるチェルフィッチュは、岡田利規(劇作家・演出家)率いる演劇カンパニーで、1997年に結成されました。演劇の中に、現代の若者の話し言葉や、無意識に話す時のダンスにも見える体の動きを取り入れるなど、斬新なオリジナルスタイルで脚光を浴びています。今、国内外で最も注目を集めている岡田さんが、今回のトリエンナーレのために新作を書き下ろすことでも話題となっています。

岡田利規さんにこれまでの活動や、参加にあたってのお話を伺いました。

Q: 2008年の横浜トリエンナーレに続き、現代芸術の国際展に参加するにあたっての意気込みや、上演される演出について聞かせてください。

A: 演劇ジャンルの枠組の中で作品を発表するときよりも息苦しさがなく、大胆になれそう。大胆さを心がけて、新作のクリエイションに臨みたいですね。演出は新作で、詳細は未定ですが、これまで自分たちが行っていたスタイルからの、できるだけ大きな発展、拡張、といったものをお見せできたらと思っています。

Q: 世界的に活躍されているので、海外での公演も多いと思いますが、その際に大切にされているのはどのようなことでしょうか。

A: 字幕を投影する際に、読むことのストレスができるだけ小さくなるよう、一回に投影する文字量や字幕の切り替わるペースなどには配慮します。そして最終的には、役者の身体に惹き付けられて言葉は分からないけどそんなことはお構いなしに字幕は見なくなってしまう、ということが日本語を解しない観客に対して起こせたら、上演は成功だと考えています。

Q: 美術と舞台芸術の間において、どのような共通点、相違点を感じていますか。

A: たとえば、美術は鑑賞する時間も場所も鑑賞者が自分で決める。けれどもパフォーマンスは、上演時間が定まっているし、座席からも動けない、これはかなり本質的な相違点だと思います。けれどもこれは、絶対的な条件というわけでもないから、破壊も変更も可能なものです。でも、破壊や変更を促すために、両者にはこうした境界がある、とさしあたって考えてみるのは悪くないと思っています。

Q: 今年7月、金沢21世紀美術館の展覧会場内で、現代美術アーティスト塩田千春さんのインスタレーションと共に演じたパフォーマンス作品《記憶の部屋について》を行った感想を聞かせてください。

A: 先ほど述べたパフォーマンスの条件を、思い切り破ったパフォーマンスを行えたのがなにより楽しかったです!

Q: これまで観た中で印象深い展覧会を挙げてください。

A: かなり昔に横浜美術館で見た、「戦後日本の現代美術展」。それと今年ニューヨークで見た「ザ・サード・マインド」という、アジアの芸術や思想が欧米の美術に与えた影響を紹介する展覧会。あとでこの二つは同じキュレーター(アレクサンドラ・モンロー)の手によるものと判明しました。

Q: 最後にあいちトリエンナーレへ来場される観客へのメッセージをお願いします。

A: 美術祭出品作として(「芝居」としてでなく)見に来てくれると、お互い楽しいと思います。お待ちしております!

長者町地区は名古屋駅と栄の間に位置します。都心にあつて喧騒とは違う独特の賑わいをもつまち。「長者町織維街」と書かれた個性的なゲートを進んでいくと、碁盤割の街並み・街区の真ん中に寺・神社のある会所など、400年の城下の歴史にふれることができます。戦後は日本三大織維問屋街の1つとして発展した歴史を持ち、最近では織維業界が不況の波にさらされながらも、新しいごきによって反響を呼んでいる場所です。10年前、地元の人の方でつくりあげた祭は、「糸びす祭」として年々発展し、現在では2日間で6万人もの人を集めています。問屋がお店打ち商品を販売したり、毎年新しいイベントが行われるとあって、名古屋の中でも有数の人気ぶり。また、まちの有志によって空きビルを活用した「糸びすビル」の登場により、おしゃれなカフェやインテリアショップ、評判のレストランや花屋などこだわりの店舗も増えてきました。このまちでは、歴史に支えられた安心感や懐かしさ・文化に加えて、新しさをも包容し、独特の雰囲気を楽しむことができるのです。

塩田千春+岡田利規
《記憶の部屋について》
「堂についての100の物語」(2009年、金沢21世紀美術館)より
出演: チェルフィッチュ



アーティスト・インタビュー

チェルフィッチュ

※チェルフィッチュ(cheliffitch)とは自分本位という意味の英単語セルフフィッシュ(selfish)が、明晰に発語されぬまま幼児語化した造語で、現代の日本、特に東京の社会と文化の特性を表したユニット名。

世界の国際展

[ヴェネチア・ビエンナーレ]

世界各地でビエンナーレ、トリエンナーレと銘打った国際美術展が開催されています。イタリア語でビエンナーレ(Biennale)とは2年に一度、トリエンナーレ(Triennale)とは3年に一度の開催年を意味しています。新たな芸術の潮流をリードしていく場であるとともに、その多くは地域振興のための文化事業としての役割も担っています。最古の歴史を誇るのが、1895年にスタートしたヴェネチア・ビエンナーレ。メイン会場ジャルディーニに建ち並ぶ各国パビリオンの展覧会、コミッションの企画による特別展や関連企画等々、ビエンナーレの開催期間、水の都を舞台に現代美術の饗宴が繰り広げられます。日本館は1956年に設けられ、草間彌生、棟方志功など多くの作家達をさらなる世界の舞台へと送り出してきました。今年は日本館代表、やなぎみわの巨大な写真作品と館を覆い尽くすテントが話題を集めています。(2009年11月22日まで開催)



チェン・ゼン Chen Zhen
Back to Fullness, Face to Emptiness 1997
第53回ヴェネチアビエンナーレ(2009)での展示風景
© Chen Zhen, by SIAE, 2009

現代美術のキーワード

[インスタレーション]

絵画、彫刻などと同様に作品形態を表す言葉として、〈インスタレーション〉があります。本来は「設置」や「架設」を意味しますが、1970年代以降、現代美術では、場所や空間全体を作品として構成する表現方法を表す言葉としても用いられています。(インスタレーション)においては、写真、映像などの異なるメディアが複合的に用いられることもあり、空間の中で三次元的な体験を伴って作品を観賞することができます。基本的には一過性なもので、それぞれの設置場所、環境に固有であり、展示スペースによって変化したり、展覧会が終れば跡形もなくなってしまうものもあります。あいちトリエンナーレ2010においても、様々なインスタレーション作品が出品される予定です。



ジェルティン Gelitin
Klunck-Buddhism 2009
wood, stone, fabric h.78 x w.851 x d.481
小山登美夫ギャラリー(東京)での展示風景 撮影: 岡野圭

現代美術との出会い

青木淳

建築家

ルイ・ヴィトン 名古屋栄店
撮影: 青木淳建築計画事務所



撮影: 筒井義昭

時間が交錯する都市と現代美術

名古屋と聞くと、大名古屋ビルヂングの屋上にあつた回転する地球儀広告塔が、真っ先に思い浮かぶ。もっとも、森永ミルクキャラメルこの球体広告塔は、かつて東京銀座にもあつたので、名古屋特有のものというわけではない。なのに、ぼくのイメージのなかでは強く名古屋とむすびづいている。東京の方が、とうに1983年に撤去されているのに対して、名古屋の方は、つい最近まで残っていたからだろうか。ともかく、名古屋の町を流れる時間は、ゆったりしている。そのおかげで、かつて思い描かれた未来像が、時間を経てそのまま残り、現実の現在との間にズレが生まれ、それがこの町独特の雰囲気醸し出している。中日ビルもそう。名古屋の町には、どことなく、レトロ・フューチャーの匂いがある。1998年のこと、そんな町に、ルイ・ヴィトンのお店を設計することになった。正直、困った。新しいものによって、名古屋特有の空気を壊し、無味無臭の町にしたくはない。でも、懐古趣味に走って、過去を捏造するのでもまた憚られる。新しいモノも、古いモノも使えない。だから、モノをつくりながらも、それを見るのではなく、そのモノを通してただ遠くを見るようなことができたか、と思つた。それで、焦点や興行きの定まらない、霧が固まって塊になっている、というようなデザインを提案した。あいちトリエンナーレの会場のひとつ、愛知芸術文化センターから、久屋大通を渡った角にある「ルイ・ヴィトン 名古屋栄店」である。そこにあるモノを見ながら、ずっとむこうの世界に連れて行かれる。しかし、それは、建築よりはるかに現代美術で、もっと純粹に、もっとストレートに、またもっと切実に、行われることだ。来年のトリエンナーレでの出品作家のひとり、島袋道浩さんの個展が、去年、東京であった。屋上に出たら、隣のビルの屋上の看板が、裏側から見えた。その裏側の、道からは見えない側に、草原を進む象の後ろ姿を映した写真が大きく貼ってあつた。近くに、もうすぐ壊されてしまう古い団地がある。その建物の群れと、群れから外れた一匹の象。はるか遠くの象の哀しさが、再開発するというものの哀しさと、つながってくる。こうして、遠くの世界に行つたつもりが、すぐこの日常の、ふだんは見えていないもうひとつの側面に戻っている。現代美術は、こうして、現実の日常のすぐ裏側の、もうひとつの日常にぼくたちを送り届ける。虚実ともども、多くの時間が交錯するこの名古屋の町に、あいちトリエンナーレは、では、どんなもうひとつの日常を見せてくれることになるのだろうか。それを今からとても楽しみにしている。

PICK UP

[長者町地区]

